

明治・大正期の中国語教科書における可能表現
—大橋末彦『官話急就篇詳譯』について—

Potential Form in Chinese Textbooks of the Meiji and Taisho Periods:
On Ohashi Suehiko's "Kanwakyushuhen Syoyaku"

常 衛 邦
CHANG, Weibang

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第50号 2020年12月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.50 2020

明治・大正期の中国語教科書における可能表現 —大橋末彦『官話急就篇詳譯』について—

常 衛 邦*

1. はじめに

明治・大正期における中国語教科書を日本語資料として扱い、可能表現について考察する。本稿は、『官話急就篇』(明治37年)の訳本である大橋末彦『官話急就篇詳譯』(大正6年)における可能表現の意味用法について分析し纏めたものである。以下、大橋末彦『官話急就篇詳譯』を大橋訳と呼ぶことにする。

2. 『官話急就篇』と『官話急就篇詳譯』について

2.1 本稿の使用資料について

本稿で使用した資料は、六角(1992)に収録されている影印本である。それぞれの奥付で出版年などの情報を確認し以下に示す。括弧内は、使用した資料の出版年、版数である。

・『官話急就篇』宮島大八¹著 明治37年8月28日 善隣書院発行(大正7年5月28日 第四十六版)

表紙・勝海舟²による題字・目次・名辞・問答之上・問答之中・問答之下・散語(第一から第十一)・家庭常語(臨幼、款客、常會、行情、読書)・応酬須知・奥付からなっている。(家庭常語、応酬須知は張廷彦³が書いた)

・『官話急就篇詳譯』大橋末彦訳 大正6年9月1日 上山松蔵発行(大正10年3月15日 第十三版)

表紙・前文部大臣法学博士の高田早苗による題字・早稲田大学教授の青柳篤恒による序文・自序・凡例・目次・名辞・問答之上・問答之中・問答之下・散語(第一から第十一)・家庭常語(臨幼、款客、常會、行情、読書)・応酬須知・奥付からなっている。

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程

¹ 1867年米沢藩生まれ。1871年東京に移る。1887年—1894年清国へ留学。1895年詠帰舎を開設、中国語と漢学を教える。1898年詠帰舎を善隣書院と改称した。(六角(1999) p.178~p.222)

² 安藤(1988)は「大八の父誠一郎は同じ幕臣出身の勝海舟と親交があった」と述べている。(p.40)

³ 中国人講師である。邵(2004)は「中国人講師の張廷彦は宮島大八の善隣書院で中国語を教え、後に東京外国語学校の中国語教員も務めた人物であった」と述べている。(p.2)

2.2 教科書の使用状況

中国語教育史の先行研究から、『官話急就篇』と大橋訳を紹介する。

『官話急就篇』について、六角（1988）において以下の記述がある。（下線は筆者による）

『官話急就篇』は、日露戦争が始まった年、明治三十七年（一九〇四）八月に初版を発行し、昭和八年（一九三三）一〇月改訂して『急就篇』と改題するまで約三〇年間に一二六版を重ねた。……かつて中国語が「支那語」とよばれた敗戦の時まで、日本の国内はもちろん海外の植民地においてさえ、中国語を学んだ初学者は、だれでも一度は手にしたことがある教科書である。

『官話急就篇』は126版も重ね、人気があったと考えられる。教科書の対象は中国語の初学者である。出版されてから、昭和20年まで、日本国内と海外の植民地において、多くの人に読まれていたと思われる。

また、安藤（1988）において、次のように述べている。（下線は筆者による）

善隣書院では、初級コースの教材には、もちろんこの『急就篇』を用い、半年でこれを終えると、中級コースの『官話指南』に進んだ。……これらのテキストを先生に就いて朗々と読みあげ、暗誦するのである。（安藤1988）

『官話急就篇』は先生に就いて読み上げるという方法で使用されていたことが分かる。

大橋訳について、六角（1992）では、次のように述べている。（下線は筆者による）

訳者の大橋末彦は、明治34年7月東京外国語学校清語学科別科第3回の修了である。そして修了の年に宮島大八の善隣書院に入学して勉強した。……この本を書いた当時、大橋は山口高等商業学校教授であった。

大橋訳は、宮島大八の学生であった大橋末彦が、山口高等商業学校で教師を務める時、翻訳したものとなる。

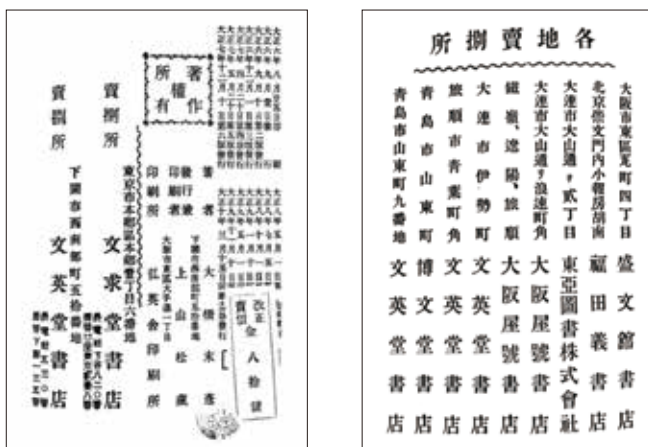


図1 大橋訳の奥付 六角（1992）に収録される影印本による

奥付から、日本における売捌所は東京の文求堂書店、大阪の盛文館書店と、下関の文英堂書店であると確認できる。売捌所の一つは山口にあるため、大橋訳は山口高等商業学校の中国語授業において使用されたのではないかと考える。

3. 大橋末彦について

2節で述べたように、六角 (1992) の記述から、大橋訳が出版された時、大橋末彦は山口高等商業学校の教師であったとわかる。

『山口高等商業学校沿革史』⁴には、教職員の異動について以下 (a) から (c) までの記述があった。(記号は筆者による)

- (a) : 任命月日 明治四十一年四月六日講師嘱託 氏名 大橋末彦 原籍 東京 擔任學科
清語 出身、前任、其他 東京外語別科出身、日清日露両役従軍陸軍通譯、早稲田大學
及早稲田實業學校講師、大正二、二、三任教授 (p.573)
- (b) : 大正五年七月現在教職員 教授 支那語 大橋末彦 東京 (p.750)
- (c) : 任命月日 大正十二年三月三十一日依願免本官 氏名 大橋末彦 原籍 東京 擔任學
科支那語 出身、前任、其他 前出 (p.761)

このような記述から、次のことが分かった。(a) より：大橋末彦は東京出身で、明治41年に山口高等商業学校の講師になった。東京外国語学校別科を修了後、従軍陸軍通譯、早稲田大学、早稲田実業学校教師をしていた。(b) より：大正5年に山口高等商業学校の教授になった。(c) より：大正12年に山口高等商業学校の教職を辞任した。

大橋訳の初版は大正6年である。大橋が山口高等商業学校の教師になってからの9年目に、大橋訳が出版されたことになる。

4. 用例収集及び分類について

大橋訳の各章において、会話文に番号が振られている。本稿は、大橋訳の番号を利用し、用例を示す。もとなつた本『官話急就篇』では、問答之上・問答之中・問答之下のみ番号が振られている。統一にするため、散語・家庭常語・応酬須知における中国語文を示すときも、大橋訳の番号をそのまま利用する。可能表現の部分は、筆者より下線を引いた。

用例は全部で140収集した。収集した用例を形式上の違いにより、分類すると、大きく以下の (ア) から (オ) まで、五種類に分けられる。形式の分類について大橋訳における用例を示して説明する。

(ア) : 可能動詞。五段活用の動詞を下一段活用の動詞に変化させ、可能の意味を表現するもの。

⁴ 『山口高等商業学校沿革史』は、1940年に山口高等商業学校改称三十周年記念事業として、編纂された本である。校内所蔵資料、官報法令、郷土資料などにより、学校の淵源と変遷、学規教則及び教育方針、学園生活を記述したものである。(「凡例」より)

- ・貴下支那語を咄せますか 少し出来ます

您會說中國話麼 會一點

問答之上 62

(イ)：動詞未然形＋(ラ)レル。この形式をさらに五段活用、五段活用以外(一段活用、変格活用)に分けたのは、五段活用以外の動詞は、可能動詞にならないからである。現代日本語には、一段動詞で「食べる→食べれる」のような「ら抜き言葉」があるが、扱った資料の中から見つからなかった。

五段活用

- ・君あちらに行て其日に帰つて來ることが出来ますか。其日には私どうも帰られない

你到那兒，當天可以回來麼 當天我可回不來

問答之中 30

五段活用以外

- ・肉は瘦せたのは私まだ食べられますが、肥えたのは私一口も食べられません

肉是瘦的我還可以吃 肥的我一口也不能吃

問答之中 77

(ウ)：デキルを用いる形式。主に「動詞連体形＋コト(ガ)デキル」、「名詞など＋(ガ)デキル」の二つの形式が見られる。

コト(ガ)デキル

- ・大方皆先に普通学を習つて習ひあげた後に大学などに入ることが出来ます

大概都是先學普通學，學好了之後，可以入大學甚麼的

問答之下 59

名詞など＋(ガ)デキル

- ・お前一個の子供の癖に、何で鬼征伐が出来るものか

你一個小孩子怎麼能打鬼哪

問答之下 74

(エ)：エルを用いる形式。「動詞連用形＋エル」と「動詞連用形＋エラレル」が見られる。「動詞連用形＋エラレル」について、神田(1961)では、「得られる」は、可能を表すことばを二重に使ったものである。これは、一つでは可能の意が十分表われていないように感じて、重ねて用いるのではないかと思われる。この他にも「でき得る」とか「られ得る」とかがあるが、一般的な形ではない」と述べている。

動詞連用形＋エル

- ・私家も出ないで幾千里外の物を飲み得ると云ふことは實に口果報があります

我沒動窩兒，就喝著幾千里外的東西，實在有口頭福兒。

問答之下 56

動詞連用形＋エラレル

- ・私は咄さないのではない、私は咄し得られないのである

我不是不說 我是說不上來

散語第二 23

(オ)：動詞連用形＋キル。この形式について、九州方言だと指摘する先行研究がある。渋谷(1993)では、九州北東部では、「ある(意志的な)動作を最後までやり遂げる(完遂する)」という意味

から転じて、「動作主体のその動作をやり遂げる能力のほうに注目する能力可能形式になった」と述べている。大橋訳における「動詞連用形+キル」について、方言性の有無を確認するため、一つの分類と設定した。

・この位の事がまだやり切れないのか

這麼點兒事，還辦不了麼

散語第三 38

このほか、「デキル」を用いるが、意味は可能ではなく、「仕上がる・完成」になっているものがある。これを除外した。

・仕事が出来たらば私人を差立て、取りにやりませう いらしません出来ましたら私共貴下に送つて差上ます

得了 我打發人取去罷 不用了 得了我們給您送了來

問答之中 128

次の表1を用いて大橋訳各章における可能表現の使用状況を示す。数字は用例数である。用例の数をみると、可能動詞、(ラ)レルを用いる形式、デキルを用いる形式は中心的で、その他の形式は周辺的であると言えよう。

表1 大橋訳可能表現の使用状況

		問答之上	問答之中	問答之下	散 語	家庭常語	応酬須知	合計
可 能 動 詞		4	3	6	10	1		24
(ラ)レルを用いる形式	五段活用		6	10	9	2		27
	五段以外		6	9	1			16
デキルを用いる形式	コト (ガ)		14	10	15	3	3	45
	名詞など	3	3	1	3			10
エルを用いる形式	～エル			3	4			7
	～エラレル			2	3			5
動詞連用形 + キル					6			6
合 計		7	32	41	51	6	3	140

このような使用状況は章ごとの内容に影響される可能性があると思われる。したがって、六角(1992)の『官話急就篇』に対する記述を引用して以下に示しておく。

問答之上は……全部で102句の問答で、多くは10字前後の句による一問一答の形式となっている。問答之中は……こうした簡単な句に始まるが、終わりになるにつれて少し長い表現となる。……問答之下は、前を承けて簡単な問答に始まるが、次第にちょっとした内容の対談となる。……問答のあとの散後は……^{原文ママ}配列された語句の前後とは相互に関連しないが、常用される短い語句が、11項にわたり配列されている。附の家庭常語と応酬須知は……家庭生活での常用語句や

交際上で必要な表現が10頁に取められている。

5. 各形式の意味用法について

この節では、各形式の可能表現それぞれ形式の意味用法を、文体、構文、可能が成立する条件の面から、考察する。

可能表現には、動作を言い表すものと状態を言い表すものがあると考えられる。動作を言い表すものは、動作的と呼ぶことにする。

状態を言い表すものには、事態が常に継続し成立するものと、可能成立の制約条件が継続しない、変化が予測される或いは変化の傾向にあるものがある。前者は恒常的、後者は一時的と呼ぶことにする。以下、用例を挙げながら、説明する。

5.1 可能動詞

可能動詞を用いる可能表現は、概ね以下のタイプに分けられる。

タイプ①：事態が成立する（しない）条件が示されず、時間的な制約も受けない。例えば、次の(1)と(2)である。これらは動作主体自身の能力を述べるものである。学習で獲得する能力「中国語を話す」、「棋を打つ」は、余程のことがないかぎり、常に動作主体が備える能力となる。恒常的だと考える。

- (1) 貴下支那語を咄せますか 少し出来ます

您會說中國話麼 會一點

問答之上 62

- (2) 私の承る處では貴下の打たれる棋は大層御上手だそうですね。私出来ません。お隠しなさるな。

何を隠しませう私は本當にやれませぬ

我聽說您下的棋很高 我不會 別藏奸了 藏什麼奸呢, 我實在不會

問答之中 86

タイプ②：事態が成立する（しない）条件が示されているが、その条件の下で、常に事態が成立する（しない）。表現される事態も恒常的だと考える。

次(3)から(6)まで、従属節には、「～ば」で条件が示される。この条件のもとで、主節の事態が起こる（起こらない）と予想されるものである。(7)も同じように、「ほかところから回って」という条件が、「行ける・行けない」の前提となるため、このタイプに分類した。

- (3) 一年の間稽古したらば大抵咄ませませうね

學了一年得工夫, 大概就可以會說了罷

散語第二 31

- (4) 此様に取計へば吃度やれる

這麼辦一定行

散語第三 33

- (5) 石鹼で洗へば洗ひ落せます

拿胰子洗, 就洗掉了

散語第五 78

(6) 東に向へばどの地方に行けますか

往東到甚麼地方

散語第十 2

(7) 外の處からは廻つて行けないのか

打別處繞不過去麼

散語第十 14

これらの用例は、事態の可能・不可能は、ある時点から成立し、一定の期間において続いて最後にある時点で終わるといような意味を含んでおらず、常に存在するものである。このような共通点は、時間的に安定すると言えよう。タイプ①の用例は特に制約条件がない。動作主が常に持っている能力を述べている。タイプ②の用例には、可能表現で表す事態は、ある客観的な前提条件のもとで、常に可能・不可能である。出来事の自然な成り行きを述べるものである。

タイプ③：ある一時的な条件の制約により、事態が成立する（しない）状態となるもの。これはタイプ①とタイプ②のような恒常的に事態が成立する用例と比べると、少数である。

(8) 貴下もう一杯御飲みなさい 私飲めません

您再喝一杯 我不能喝了

問答之上 72

(9) 一つの大事の用事を相談しましたので ずつと二時になつてやつと眠れました

商量一件要緊的事 直到兩點鐘纔睡得覺

問答之下 24

用例 (8) は、お酒が勧められる時の一時的な場面に限定されている。(9) は「寝たいが、相談があつて、寝ることができない。二時になって、ようやく眠れた」と動作の実行結果を重視して解釈すると、話し手には、寝ようとする意図があつて、それができたのは二時である。「眠れました」は動作的だと考える。しかし、「相談が終わり、横になって二時から眠れた」話し手の意図が強く関与せずに、二時から睡眠状態でいるとも解釈できる。この場合、事態は一時的だと考える。

5.2 (ラ) レルを用いる形式

5.2.1 五段活用の動詞未然形+ (ラ) レル

五段動詞で (ラ) レルを用いる形式の文は、だいたい以下のタイプに分けられる。

タイプ1)：時間的な制約を受け、出来事の成立がある具体的な時間帯に限定される。次の用例に表現される事態は、それぞれ、具体的な時間帯を示す語彙：「その日」、「昨日」、「一日」に限定される。

(10) 其日には私どうも帰られない。どうして当日は帰られないですか。あちらに往て私まだ少し用事がありますよ

當天我可回不來 怎麼當天回不來呢 到那兒我還有點事哪

問答之中 38

(11) 昨日君は彼を訪問に行かれたか遇はれましたか

昨兒你找他去見著了麼

問答之下 13

(12) 此文の仕事は一日でも仕終わられない

這些活，一天也做不完

散語第三 3

(10) と (11) は、その時間帯において、動作主体はその状態にいると解釈する場合は、一時的と考える。もし、その動作の成立に注目して解釈する場合、動作的にも解釈できる。特に (11) は過去にある事態の成立を聞き手に確認する文は、動作のほうが重要視されているように思える。(12) は「この仕事多すぎる」という意味に解釈する場合、「一日」はただ仕事量の多さの程度を強調するために用いることになる。ただ、「動作主体自身の仕事処理が遅いから、一日では足りない」との意味に解釈する場合、「一日」はやはり事態を限定することになる。

タイプ2) : ある一時的な条件の制約により、事態が成立する (しない) 状態となるもの。

(13) 間内が熱く睡られません

屋裏熱，睡不著覺

問答之中 132

(14) 貴下の御住所を知らませず夫故に行かれませんでした

不知道您的住處 所以沒能去

問答之下 11

(15) あれ丈けの品物は各店で皆賣切らした、全く買はれない

那些貨各鋪子都賣短了 所買不著

散語第四 22

話し手が発話するとき、自身を取り囲む外的な条件は、事態の成立を制約する。(13) から (15) まで、「発話時の条件」はそれぞれ「熱い」、「住所が分からない」、「売り切れ」である。ここで示された条件は、話者が発話する時にあるものである。したがって、そのもとで表現される事態は一時的になる。

タイプ3) : 動作は現時点では出来ないが、事態が改善される傾向にあり、後にできそうなもの。

(16) 此話は私どんなに咄してもまだ好く咄されない

這句話我怎麼說也說不好

散語第二 23

(17) 私幾らか咄すことが出来ますが、また⁵甘く咄されません、どうぞ貴下充分お教へ下さい

我會說幾句，還說不好，請您多多指教

讀書 21

用例 (16)、(17) は、話し手は、今、「中国語をうまく話す能力がない」と述べている。しかし、「まだ」と共起し、話者はそれができるようになることを期待していると読み取れる。話者は努力して事態は変化の傾向にあるため、これらの用例も一時的であると考えられる。ただ、これらの用例は、話者自身は動作ができるように期待するだけであり、それが確実にできるようになる保証はない。前述したタイプ2) より、時間的に安定であると考えられる。

5.2.2 五段活用以外の動詞未然形+(ラ)レル

五段活用以外の動詞で (ラ)レルを用いて可能・不可能を表現するものは、可能動詞、五段動詞

⁵ 原文ママ。「まだ」と思われる。

の(ラ)レル形と同じような意味用法を有すると思われる。これは、五段動詞なら、可能動詞形にするか、(ラ)レル形にするかという選択があるのに対して、一段活用動詞、変格活用動詞にはそのような選択がないからであると思われる。以下二例を挙げて説明する。

(18) 私は魚を食べるのが好きです。肉は。肉は瘦せたのは私まだ食べられますが、肥えたのは私一口も食べられません

我是愛吃魚 肉呢 肉是瘦的我還可以吃 肥的我一口也不能吃 問答之中 77

(19) 彼は又来るとも来ぬとも言て居ませんでしたか。彼は又来たいが併し鳥渡には来られないと言て居ました。

他沒提還來不來麼 他提還要來 可是一時不能來 問答之中 95

用例(18)は、「肥えた肉が嫌いだから、食べることができない」の意味で、主体である「私」個人の好き嫌いを述べるものである。個人の好き嫌いは余程のことがない限り、変化しないものであるので、恒常的だと思われる。可能動詞タイプ①と類似している。(19)は事態の可能・不可能は時間帯を示す「鳥渡には」に限定されている。五段動詞の(ラ)レル形のタイプ1)と類似している。

5.3 可能動詞と(ラ)レルを用いる形式における周遍的な用法

上述したように、可能動詞は、恒常的な事態に多用され、(ラ)レル形は一時的な事態に多用されることが分かる。しかし、以下、(I)と(II)の場合においては、この限りではない。

(I)：尊敬表現の意味合いが入っている場合。たとえば、用例(20)には、大橋は割注を追加している。

(20) 閣下の敬語どうぞお飲み下さい 此れは私の國の酒です、閣下に飲まれますか

閣下請喝 這是我們敝國的酒 閣下喝得來喝不來 問答之下 56

「閣下」に「あなたの敬語」との注釈をつけている。よって、聞き手は話者の目上の人だと考えられる。大橋は尊敬の意味を配慮して「飲む」を(ラ)レル形の「飲まれる」にしたのではないかと思う。しかし、(ラ)レルの文は、可能表現と尊敬表現のどちらにも解釈できるので、意味があいまいになる。大橋訳を使用する学習者は、(20)の文を尊敬表現の意味だけで見てしまう可能性がある。それで大橋は「飲まれ」の後ろに「飲み得」との注も付け加えたのではないかと考える。

このような表現も以下の(21)もある。相手の動作を言う時には、(ラ)レル形を用いる。割注には「遇ひ得る」と書いている。一方、自身の動作を言うときには、可能動詞を用いる。(22)、(23)において、大橋は注を入れていない。しかし、相手の動作を言う時は(ラ)レルが使用され、自分の動作を言う時は可能動詞が用いられる。したがって、相手の動作を言う場合、(ラ)レルを用いるのは待遇表現に影響されていると考える。

(21) 昨日君は彼を訪問に行かれたか遇はれましたか 遇へるのは遇へましたが、彼の家には二

人の見知らぬ御客が居ました

昨兒你找他去見着了麼 見倒見着了 他家裏有兩位生客 問答之下 13

(22) 此お菜はあなた召上られますか 何で食べられないことがあります 私は貴下のお口に合
まいと心配しました

這個菜您吃得來麼 怎麼吃不來呢 我怕是不合您的口味 問答之中 119

(23) 御互に此御別ればいつになつて御目に掛かれるか極りません

僭們這一別，不定多啗見哪 問答之下 36

(II)：許可・禁止または評価という語用論的な意味が中心になっている場合。

動作主体は話し手ではなく、聞き手になっている。これは話し手は聞き手に対して、ある行為をしないように発話したものである。文の意味は動作の可能・不可能より、「行為をしないように」と聞き手に述べるので、意味的には禁止の意味が中心となる。次の(24)と(25)は、禁止を表現し、「してはだめだ」と相手に伝えるものである。

(24) 此は冷水です、君呑まれないよ 差支ない僕は不断に呑んでをる

這是涼水你喝不得 不得 我常喝 問答之中 97

(25) 此話は咄されない 若し咄し出せば立派な笑ひ話です

這話說不得 若說出來 是個笑話兒 散語第二 61

次の(26)、(27)は、モノの性質に対する評価を表現する。(27)では、前文で「那兒」を重く讀んだら」の条件の下で、中国語は「聞き好い」になる。それと対比するため、違う条件である「去」の字を重く讀まんとすると」が挙げられた後文で「聞かれる」が使用される。したがって(27)において「聞かれる」は「聞きにくい」と言い換えることができると考えられる。

つまり、この場合において(ラ)レル形は「～よい」、「～やすい」と言い換えることができる。評価の意味が中心になっている。

(26) 此茶葉は大變宜しい……おやまあ此様に高いのですか、道理でこんなに飲まれると思つた

這個茶葉很好……敢情這麼貴哪，怪不得這麼受喝呢 問答之下 53

(27) 君もし「那兒」を重く讀んだらそれは聞き好いが、君「去」の字を重く讀まんとするとそれは聞かれる

你若把那兒念重了，就受聽，你要把去字兒念重了，就不受聽了 問答之下 67

ヒトの能力を評価するとき、可能動詞と(ラ)レルを用いる形式は区別なく使用されるように思える。たとえば、以下の(28)、(29)である。中国語が上手という評価の意味合いで用いる。同じ動詞「話す」を可能表現にすると、可能動詞と(ラ)レルを用いる形式両方も見られる。また(28)と(29)からは、可能動詞と(ラ)レル形の待遇価値の差も読み取れる。(28)は動作主体「お前」の中国語の上手さを言い表すもので、可能動詞「咄せない」は普通体である。(29)は第三者「彼」の能力を評価するもので、(ラ)レル形は「咄されます」の丁寧体である。同じくヒトの能力を評

価する意味であるが、丁寧体「ます」に変化させるのは(ラ)レル形である。このことは、(ラ)レル形は尊敬の意味を含んでいる裏付けであると考えられる。

(28) 誰も皆お前程は咄せない

誰都説不過你

散語第二 14

(29) 彼は今はどんな話でも皆咄されます

他現在什麼話都會說了

散語第二 19

このように、(ラ)レルを用いる形式は、許可・禁止、モノの性質に対する評価のような語用論的な意味と尊敬の意味を含んでいる場合に多用されると思われる。これは、可能動詞は可能表現の専用形式であるのに対して、(ラ)レル形は可能表現以外、受け身、尊敬、自発の表現にも使用できるからではないかと思われる。

5.4 デキルを用いる形式

デキルを用いる形式は基本的に、可能動詞、(ラ)レル形と同じように使用されると考える。たとえば、以下のように、一方は可能動詞または(ラ)レル形であり、一方はデキル形式になっている。

(1) 貴下支那語を咄せますか 少し出来ます (再掲)

您會說中國話麼 會一點

問答之上 62

(10) 君あちらに行て其日に歸つて來ることが出来ますか。其日には私どうも歸られない。どうして当日は歸られないですか。あちらに往て私まだ少し用事がありますよ (再掲)

你到那兒，當天可以回來麼 當天我可回不來 怎麼當天回不來呢 到那兒我還有點事哪

問答之中 30

(17) 私幾らか咄すことが出来ますが、また甘く咄されません、どうぞ貴下充分お教へ下さい

我會說幾句，還說不好，請您多多指教 (再掲)

讀書 21

5.4.1 名詞など(ガ)デキル形式

この形式は、主に動作性を有する名詞、サ変動詞に使用される。

(30) 彼は話が出るが行ふ事は出来ない

他是能說不能行

散語第二 52

(31) お前一個の子供の癖に、何で鬼征伐が出るものか

你一個小孩子怎麼能打鬼哪

問答之下 74

単独に使われる場合は、可能の対象が省略されていると考える。省略されたと思われるものを、筆者が補って括弧内に示す。

(1) 貴下支那語を咄せますか 少し(支那語が)出来ます (再掲)

您會說中國話麼 會一點

問答之上 62

- (2) 私の承る處では貴下の打たれる棋は大層御上手だそうですね。私（棋を打つことが）出来ません。お隠しなさるな。何を隠しませう私は本當にやれません（再掲）

我聽說您下的棋很高 我不會 別藏奸了 藏什麼奸呢，我實在不會

問答之中 86

5.4.2 コト（ガ）デキル形式

この形式は、説明文のような文章語的な文体、改まった場面に使われる。この点において可能動詞、（ラ）レル形と区別される。

説明文のような文体は以下 (32) ~ (36) がある。それぞれの意味合いは次のとおりである。(32) は、「こうした後、こうできる」(33)、(34) : 「こうしたら、こうなる」のような一般的なルールについての説明である。(35) は何らかの官職に任命できる対象の説明、(36) は「……あって初めて……が成立する」成立する条件についての説明である。いずれも人に何か理解してもらうように説明し述べる文である。

- (32) 大方皆先に普通学を習つて習ひあげた後に大学などに入ることが出来ます

大概都是先學普通學，學好了之後，可以入大學甚麼的

問答之下 59

- (33) 若し遊民が少なくして、仕事を持って居る人が多ければ、國家はすぐに富強になることが出来るのです

若是遊民少，有事業的人多，國家就可以富了

問答之下 68

- (34) 若しお前が聴好い話をすれば、お前にも聴好い話を聴く事が出来ます……お前若し好く／＼人を待遇しないと、誰も好く／＼お前を待遇することは出来ないのです。

若是你說好聽的話，你可也就聽見是好聽的話了……你若是不好好兒的待人 誰也不能好好兒的待你

問答之下 73

- (35) あれは満人の役目で漢人は任命することが出来ない

那是滿缺，漢人不能放

散語第十一 32

- (36) 太子少保衛がありて始めて宮保と稱へることが出来る

有太子少保衛，纔能稱宮保

散語第十一 42

次の (37)、(38) は「応酬須知」から収集した用例である。すでに4節で述べたが、「応酬須知」の内容は、「家庭生活での常用語句や交際上で必要な表現」と六角 (1992) が説明している。主に中国で人と接する際のマナーが書かれている。(37)、(38) は中国において人と雑談するとき、聞いたら失礼になること、してはいけないことを説明し、禁止のニュアンスがある。

- (37) 只一人と計り咄すことは出来ません、若しも必要の咄さねばならぬ話があれば先づ外の方と言ひなさい

不能和一個人說，若是有要緊得說的話，得先和別位說

応酬須知 10

(38) 假令眞面目の話の内でも又澤山咄すことの出来ないのがあります

就是正經話裏頭，也有好些不能說的

応酬須知 11

相手に許可を求める時や、改まった場面で使われるものがある。(39)は、相手に許可を求めている。文末の「でせう」からは、表現が柔らかいと考ええる。(40)中国語文では、二人称代名詞は「你」より待遇価値の高い「您」が使用される。場面は固いと考ええる。(41)文末の「申し上げます」は謙遜語で改まった場面だと読み取れる。

(39) 此事は二三日延引して取計ふ事が出来るでせうね。こんな必要な事を君はまだ延ばしてする積りですか

這個事情可以緩兩天辦罷 這麼要緊的事，你還打算緩辦麼

問答之中 138

(40) 私共は貴下のお錢を餘分に頂くことは出来ません

我們不能多算您的錢

散語第八 16

(41) 夫故に私をよこしまして貴下にお歡び申し上げます。又私の〔弟〕〔妹〕に少し何かを用意して上げることが出来ませんでした

所以打發姪女兒來給您道喜 也沒得給我（兄弟）（妹々）預備點兒甚麼

行情 2

このように、コト（ガ）デキル形式は、文を長くすることで、迂言的な言い方になるから、改まった場面に使用される。また、渋谷（1993）では、スルコトガデキルは「分析的な形式」とされる。「動詞（句）部と可能部が線条的に配置されることによって、動詞部と可能部が融合している可能動詞よりは動詞（句）部の独立性がはるかに高くなる」と述べている。つまり、コト節の内部に事態を描き、それに対して可能・不可能を述べるという構造であるので、事態と可能・不可能が分離されている。したがって、コト（ガ）デキル形式は分析的に事態の可能・不可能を述べることができるから、説明文のような文体に使用される。

5.5 エルを用いる形式

5.5.1 エルを用いる形式と文体

エルを用いる形式は、動詞連用形+エルと動詞連用形+エラレルがある。どちらも古い文体に使用されることは共通点である。(42)、(43)の「である調」や、古い表現と一緒に現れる文(44)～(46)が見られる。つまり、この形式は大橋訳において、口頭表現からやや外れ、比較的にかたい表現であると考えられる。あるいは(42)のように、漢文訓読文のようなやや古い文体に使用されているのではないかと考えられる。

・「である調」（二重下線は漢文と漢文に対応する訓読文）

(42) 必ずしも刀を以て人を殺すのを始めて殺すと云ひ得るのではない、即ち或る悪い方法で人を仕置するも刀で人を殺すのと一様である。天下いづくんぞ定まらん、一に定まらんか、孰か能く之を一にせん、人を殺すを嗜まざるもの能く之を一にせん^{原文ママ}だ

- 不是必得拿著刀去害人，纔說殺，就拿一個壞法子去治理人，也是和拿刀去殺人是一樣的。天下惡乎定，定于一，孰能一之，不嗜殺人者能一之 散語第十一 77
- (43) 私は咄さないのではない、私は咄し得られないのである
我不是不說，我是說不上來 散語第二 23
- ・古い表現
- 用例 (44) の「なき」、(45) の「ぬ」、(46) の「らるゝ」が見られる。(二重下線の部分)
- (44) 彼の先生が言ふのに天下に最も愛すべきは能く獨立し得る人で最も厭ふべきは向上の希望なき人だと
他的先生說，天下最可愛的是能自立的人，最可恨的是不要強的人 問答之下 64
- (45) 彼の咄し得られぬ話はない
沒他說不上來的話 散語第二 16
- (46) 彼は今鬼を征伐に行きたがるからには、また或は打ち得らるゝかも知れない
他現在既然要打鬼去，也許是打得的了 問答之下 74

5.5.2 動詞連用形+エラレル

動詞連用形+エラレル形式は、(43)、(45)～(48)の5例がある。(43)、(45)と(46)を以下に再掲する。これらの用例の中国語文をみると、事態の可能・不可能は、可能補語⁶によって表現されている。それぞれ中国語の可能補語を括弧をつけて示す。

- (43) 私は咄さないのではない、私は咄し得られないのである (再掲)
我不是不說，我是說不(上來) 散語第二 23
- (45) 彼の咄し得られぬ話はない (再掲)
沒他說不(上來)的話 散語第二 16
- (46) 彼は今鬼を征伐に行きたがるからには、また或は打ち得らるゝかも知れない (再掲)
他現在既然要打鬼去，也許是打得(了)的 問答之下 74
- (47) 君がお聴になつて彼の咄す話は學修し得られませうか。
你聽他說的話可以學得(出來)學不(出來) 問答之下 23
- (48) 大抵皆咄し得られます
差不多都說(上來)了 散語第二 20

張(1998)は、「可能表現の中には結果の状態の側面からある事態の実現を問題として取り上げる形で可能・不可能の意味を表す一類の可能表現が存在している」として、「結果可能表現」と命

⁶ 張(1998)では、「中国語の可能表現は基本的に二つの形式があるとされている。一つは「能」・「会」・「可以」のような助動詞を用いる形式であり、今一つは動詞と補語成分との間に「得」または「不」を挿入する形式(例えば、「買得」→「買得到」・「買不到」、「買來」→「買得來」・「買不來」)である」と述べている。

名した。次のように述べている。以下のVは動詞を表し、Cは補語成分を意味する。

中国語においては、結果可能表現を担う表現形式はほかならず可能補語である。可能補語は否定の形式（「V不C」「V不了」「V不得」）で使われることが極めて多いが、肯定の形式（「V得C」「V得了」「V得」）や反復の形式（「V得CV不C」「V得了V不了」「V得V不得」）で使われる場合でも、結果の状態に焦点が当てられている点において共通点のあることは言うまでもない。

張（1998）は可能補語で言い表す可能・不可能の意味的特徴を説明するため用いる用例の一つを挙げておく。

・縮手縮脚办不成大事

（びくびくしては、大きなことはできない）

「たとえ“办大事（大きなことをする）”という動作をしようとしても、成功することができない」という意味を表している。

・縮手縮脚不能办大事

（同上）

「“縮手縮脚（びくびく）”しては、“办大事”の条件が具備されない」ということを表している。

張（1998）の観点で解釈すると、中国語文（43）のような否定の場合は、「私は話しようとしても、話し出すことができない」とのニュアンスがある。（48）のような肯定の場合は、「話せる」が強調されている。中国語の可能補語は動作の結果を中心に表現する役割を担っている。

大橋は、このような結果を重視する中国語可能表現文のニュアンスを訳すために、動詞連用形+エル形式をさらに「エル」を助動詞「ラレル」をつけて表現したかもしれない。二重可能表現形式を使用し、事態の可能・不可能を強調しようとしたのではないかと考えられる⁷。

5.6 動詞連用形+キル

大橋訳の「～キル」で表す意味は、動作を実行するが、最後まで実現できない。または、望ましい程度に達成できないと考える。この形式も動詞連用形+エラレルと同じように対応する中国語可能表現は、可能補語によるものである。以下その可能補語を括弧をつけて示す。

・動作の完遂を言い表すもの

(49) この位の事がまだやり切れないのか

這麼點兒事，還辦不（了）麼

散語第三 38

(50) やり切れぬ事を彼は無理に仕やうとする

辦不（動）的事情，他偏要辦

散語第三 50

⁷ 岡山方言では、可能動詞「書ケル」に「レル」をつけて「書ケレル」と言う。このような言い方は中・四国地方に広がっているので、そうしたものの影響もあるかもしれない。

(51) 彼の仕事はやれ切れなくなつて打ち止めました

他的事情辦不(下去)了, 擱起來了

散語第三 54

(52) 君の此才能に依頼せば必ず使ひきれない錢と云ふことを僕は保証する

憑你這個才幹, 我管保準是用不(盡)的錢

問答之下 70

(50) の「彼は無理に仕やうとする」のところを見ると、そのことはできないわけではなく、最後までし遂げられないという意味であると思われる。そして、(49) の「まだ」、(51) の「打ち止めました」も、動作自体は出来るが、しかし途中までできて、最後までは実現していないことが窺える。(52) の「使ひきれない錢」もこのように、「途中—最後」の解釈ができて、「使いつくせないほどのお金」という意味だと思われる。つまりこれらの用例は、完遂する能力に注目していると考えられる。

中では、(51) 「やれ切れなくなつて」は動詞「ヤル」を可能動詞「ヤレル」にしてさらに「キル」の可能動詞形「キレル」と複合させたものである。この二重可能形式はすでに述べた動詞連用形+エラレルと同じように、中国語可能補語の結果重視のニュアンスを訳すためであるのではないかと考える。

・望ましい程度の達成を言い表すもの

(53) 私全く我慢し切れない

我所扎掙不(住)了

散語第五 70

用例(53)では「全く」は「我慢」の程度を修飾し、「我慢しきれない」というのは、望ましい程度まで我慢できないという意味だと思われる。

・動作の完遂と能否どちらにも解釈できるもの

(54) あの家は私大層氣には入つたが、唯家賃が餘りに高いので私借りきれない

那個房子我倒很中意, 就是房租太大, 我租不起

散語第六 32

用例(54)は、「部屋を借りる期間」と解釈する場合、「借りるのは借りることができるが、借り続けることができない」の意味になる。「借りきれない」は動作の完遂を言い表す。

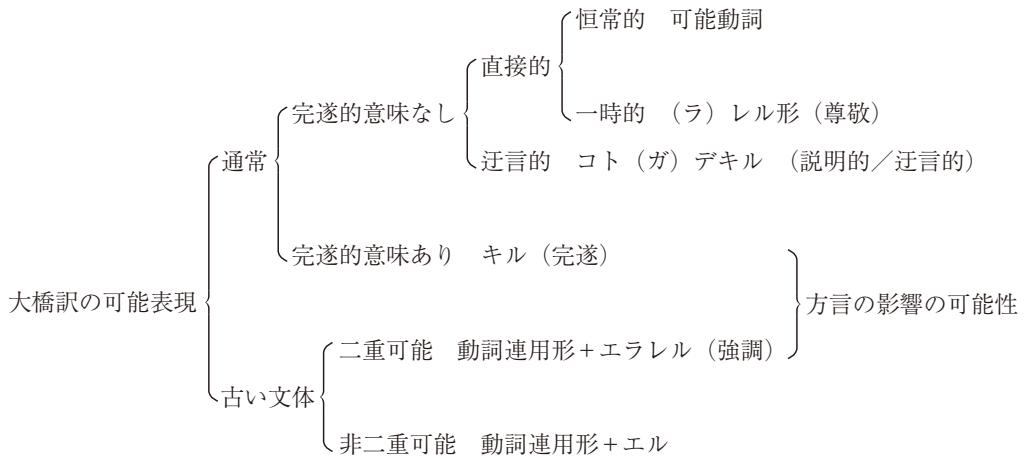
もう一つは、部屋に対して、「家賃が高いので、借りることができない」という意味解釈である。この場合、動作「借りる」は最初から実現できないと思われる。動作の能否を言い表す表現である。岡野(1988)では、山口方言には、「キル」が使われるとの指摘がある。「この「～キル」、「～キラン」は対岸の九州北部域から山口県下の長門域に伝播したのであるが、新来の表現法はまず不可能表現の方に受容されたのである。……「キル」、「キラン」のおもな使用域は、下関市と豊浦郡である」と述べている。大橋末彦は、山口で生活したことがある。大橋は動作の可能・不可能の意味で「借りきれない」を使ったとしたら、方言の影響があるかもしれない。

6.まとめと今後の課題

分析した結果をまとめると、以下の図で示すことができる。まず、古い文体に用いられるのはエルを用いる形式のみである。可能形式を二つ重ねて可能・不可能を表現するか否かで、二重可能形式の動詞連用形+エラレルと非二重可能形式の動詞連用形+エルがある。

そして、エルを用いる形式以外の可能表現形式は通常のものに分類できる。さらに完遂の意味を含意する形式とそうでない形式に分類すると、動詞連用形+キルは前者に属する。残りの形式において、コト（ガ）デキルは文を長くすることで、可能・不可能を迂言的に表現できるのに対して、可能動詞と（ラ）レル形は直接的に可能・不可能を表現する。可能動詞で表す可能・不可能の事態が恒常的なものが多く、五段活用の動詞未然形+（ラ）レルで表す可能・不可能の事態が一時的なものが多いという点で区別される。動詞連用形+エラレルと動詞連用形+キルについては、方言に影響される可能性はあると思われる。

各形式は可能・不可能を表現するが、（ラ）レルを用いる形式は尊敬の意味を含んで表現できる。コト（ガ）デキルは分析的に説明できるほか、迂言的に聞き手の許可を求めることができる。動詞連用形+キルは動作の完遂を言い表し、動詞連用形+エラレルは可能・不可能を強調して表現する。このような特徴的な意味を後ろの括弧内に示すことにする。



今後、近代の可能表現の実態を把握したうえで、明治・大正期における中国語教科書を日本語資料として、研究を進めていきたい。

参考文献

- 安藤彦太郎 (1988) 『中国語と近代日本』 岩波新書
- 板垣友子 (2016) 「官話教科書の日本語訳に関する考察」『日中語彙研究』 5
- 岡野信子 (1988) 「山口県下響灘・日本海域の可能表現法」『日本文学研究』 24
- 神田寿美子 (1961) 「現代東京語の可能表現について」〈東京女子大学〉『日本文学』 16
- 渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』 第33巻第1号
- 邵艶 (2004) 「早稲田大学の中国語教育」『研究論叢』 11
- 園田博文 (2017) 「杉本訳『官話急就篇総訳』(大正5年刊)における質問表現」『山形大学紀要(人文科学)』 第18巻第4号
- 張威 (1998) 『結果可能表現の研究―日本語・中国語対照研究の立場から』 くろしお出版
- 山口高等商業学校 (1940) 『山口高等商業学校沿革史』 山口高等商業学校
- 六角恒弘 (1988) 『中国語教育史の研究』 東方書店
- 六角恒弘 (1992) 『中国語教本類集成 第二集第一巻』 不二出版
- 六角恒弘 (1999) 『漢語師家伝―中国語教育の先人たち』 東方書店

本論文は平成三十年度岡山大学言語国語国文学会(2018年7月28日 岡山大学文法経学部講義棟12番教室)で口頭発表した「大橋末彦『官話急就篇詳譯』の可能表現」の内容を修正したものである。多くの方にご助言、ご指導をいただいた。記して感謝申し上げます。